

「講演会で未来への刺激を受けた」

大阪大学医学部 5 回生 加藤美寿季

平成 28 年 6 月 20 日、マイドームおおさかの会議室で開催された、日本 WHO 協会フォーラムで、進藤奈邦子先生は、「感染症グローバル 21 世紀チャレンジ」というタイトルで講演され、WHO の役割や 21 世紀における感染症の様子について話された。



進藤先生は WHO 本部グローバルインフルエンザプログラム・メディカルオフィサーとして、WHO の危険感染症の対策に当たり、新型インフルエンザの防止活動の中心として活躍し、さらに 2014 年に西アフリカでエボラウイルス病（エボラ出血熱）が流行した際も、チームリーダーとして活躍された。そのような、世界で大活躍されている先生のお話をお聞きすることができ、大変よい勉強になった。

お話の中でもっとも驚いたのは、先生のバイタリティーであった。進藤先生は ER 救急の医師でもあるので、その経験を活かして、WHO の中でも臨床に近いところでコミットするグループ (BRaVe) を立ち上げたという。WHO での仕事というより、臨床というよりは事務仕事の多いイメージがあったが、「ないものは作ろう」と考えられ、それを WHO という大組織の中で、立ち上げられた先生の行動力に大変驚かされた。国際保健、とりわけ医療行政に関わりたいと思っている人の中には、「将来は公衆衛生もしたいけども臨床もしたいが、両立は難しいだろう」と

考えている方も多いただろう。実際、私もそうであり、また、私がこれまでお話を伺ったことのある、国際保健に関わっている医師の中にも、臨床からは遠のいてしまっている方は多い。しかし、進藤先生のように、臨床も公衆衛生も両方行っている先生がいるということを知り、私自身の将来のキャリアプランが広がったような気がした。

また、近年の感染症の動向についても伺えた。近年の国際保健というと、「感染症の時代は終わった。これからは糖尿病や肥満などと言った慢性疾患との戦いである」との話も、他の授業などで多くうかがっていたため、肺炎や感染症はもう WHO の関心の中心ではないように思っていた。しかし、思えば、エボラウイルス病や SARS（サーズ：重症急性呼吸器症候群）などといった感染症が近年頻発していることや、5 歳未満の小児の死亡原因の 64% が感染症であることを知ると、感染症コントロールは世界の健康のためにはまだまだ重要であると感じた。また、エボラウイルス病や SARS などといった感染症がアウトブレイクした際に、その感染拡大を防ぐために WHO としてどのようなことをしているのかも伺ったが、あらためて、WHO という機関の持つ責任の重大さを感じた。たとえば、マスクなどの着用が SARS の予防などに効果的なのかどうかについても、WHO としてレポートを提出するなどしているようだが、私たちの生活に身近なところにも、WHO が関係していると知って、親密感を感じた。感染症は途上国だけではなく、世界の全ての国へと波及する恐れがある。その感染拡大を食い止めるためにも、いち早く現場の状況を知り、危険性についての宣言をしなければならぬ。自分の決定が全世界の人々の生活に影響を与えらると思うと、その責任感の重さに驚くが、やはり WHO で働くには、その仕事に値するほどの専門性や情報統合能力などが必要となってくる

